

平成16年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成16年6月10日

埼玉県病害虫防除所

IYSV (Iris yellow spot virus) によるトルコギキョウ及びユーチャリスの病害の発生について

1 発生経過

(1) 平成15年1月、県内における施設栽培のトルコギキョウで葉にえそ斑点や萎縮等の症状を示す株が発生し、同年3月、平成16年4月、他地域の農家のトルコギキョウにも同様の症状が確認された。

また、平成15年6月、県内における施設栽培のユーチャリスで葉先の黄化、株の黄化や萎縮の症状を示す株が発生した。

症状からウイルスによる病害の疑いがあったため、農林総合研究センターでRT-PCR法により検定したところ、県内では未発生のIris yellow spot virus (IYSV) が検出された。

(2) 本ウイルスによる病害は、現在、花き類を中心に6科の植物で報告されており、平成14年から本年までに近県では千葉県、静岡県、長野県、神奈川県で確認されている。

2 病原ウイルスの性質及び伝染

本ウイルスの形態は被膜を持つほぼ球状の粒子である。県内のトマト等で発生しているTSWV (トマト黄化えそウイルス) と同じトスポウイルス属に属する。

本ウイルスはネギアザミウマにより媒介され、一度ウイルスを獲得したネギアザミウマの個体は終生ウイルスを伝搬するが、経卵伝染については明らかでない。また、管理作業による汁液伝染、土壌伝染、種子伝染等の有無についても不明である。

3 病徴

症状は品種によっても異なるが、一般的には葉の黄化、えそ斑点、えそ輪紋、茎のえそ条斑及び株の萎縮等を生じる。

なお、トルコギキョウに感染する他の数種のウイルスも同様の症状を呈するため、病徴から本ウイル

スによるものと断定することは困難である。

4 ネギアザミウマについて

ネギアザミウマは、ネギ、タマネギ、ニンニクなどの主要害虫であるが、寄生植物は極めて多い。体長は1.1～1.6mm、体色は黄色のものから褐色のものまで変異が見られ、一般に夏期は淡色系、冬期は暗色系が多い。

本種の発育は非常に早く、産卵された卵は20℃で20日、25℃で16～17日で成虫となる。発生の最盛期は6月～9月で、この期間に高温少雨の気象条件に推移すると多発生となる。

5 感染植物（海外における報告を含む）

リンドウ科：トルコギキョウ

アルストロメリア科：アルストロメリア

ユリ科：タマネギ、リーキ、バルビネ（ビルバオ）、

ヒガンバナ科：アマリリス、クリビア（クンシラン）

アヤメ科：ダッチアイリス

ヒユ科：センニチコウ

6 防除対策

- （1）ウイルスの伝搬は、ネギアザミウマによって行われるので、媒介虫の防除を徹底する。
- （2）本病が疑われる株は、見つけ次第直ちに抜き取り、ウイルスを伝搬するアザミウマ類が寄生しているおそれもあるので、施設外の土中に埋める等処分する。
- （3）ほ場内及び周辺の雑草はウイルスの発生源やアザミウマ類の繁殖場所となるので、施設内外の除草を徹底する。
- （4）施設栽培では、開口部に防虫網や寒冷紗等を張り、施設内へのアザミウマ類の侵入を防ぐ。
- （5）栽培終了後、施設を密閉し、作物や雑草を枯死させてアザミウマ類の死滅をはかる。

アザミウマ類に登録のある薬剤

トルコギキョウに登録のある防除薬剤と農薬使用基準

薬 剤 名	使用時期	使用回数	希 積 倍 数 ・ 使 用 量	10a当たり散布液量
マブリック水和剤20	発生初期	2回以内	4,000倍	—
スカウトフロアブル	—	5回以内	2,000倍	—
ペイオフME液剤	発生初期	3回以内	2,000倍	150～300 $\frac{\text{L}}{\text{a}}$ / 10a
ジェネレート粒剤	発生初期	5回以内	1株当たり1～2g株元散布	—
ジェイエース粒剤	発生初期	5回以内	1株当たり1～2g株元散布	—

花き類に登録のある防除薬剤と農薬使用基準

薬 剤 名	使用時期	使用回数	希 積 倍 数 ・ 使 用 量
オルトラン水和剤	発生初期	5回以内	1,000～1,500倍
オルトラン粒剤	発生初期	5回以内	3～6kg / 10a株元散布
マラソン乳剤 ㊦	発生初期	6回以内	2,000～3,000倍

㊦ ：農薬により登録内容が異なるので注意が必要。



IYSVに感染したトルコギキョウの病徴



IYSVに感染したユーチャリスの病徴



IYSVを媒介するネギアザミウマ（成虫）